

図書紹介

丸山圭三郎著『ソシュールの思想』（岩波書店、1981年）

石倉沙織*

近年、スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールについての研究活動の再活発化（一種のリバイバルとも言うべき現象）が見られるようになっている。最も注目すべきは小松英輔氏（元学習院大学教授）によるソシュール『一般言語学講義』（以下『講義』）の第一回～第三回講義録の邦訳刊行である。最初に出たのはエミール・コンスタンタンによる第三回講義録で（2003年）、引き続きリードランジェ／パトワによる第二回講義録（2006年）、最後にリードランジェによる第一回講義録（2008年）の順で邦訳が出された。これらは、ソシュールの講義を聴いた学生たちのノートのうち、小松氏が新たに発見したものを整理して資料に加えたうえで、1994年から1997年にかけて講義録としてパーガモン書店から出版したものを底本としている。私たちはこれまでのものよりもよりいっそうソシュールの原講義に近いテクストに接近し、ソシュール言語学の新しい展開を期待できるようになっているのである。

実際、そうした流れのなかで、2009年には互盛央氏による精緻かつ大部な研究書『フェルディナン・ド・ソシュール〈言語学〉の孤独、「一般言語学」の夢』¹が刊行され注目を集めた。互氏の労作は、19世紀のヨーロッパの人文諸科学をその当時の社会的・政治的諸状況との関連から論ずるところから始まり、ソシュールの言語学講義の内容的な推移を第一回から順に丹念に追いながら、ソシュールが最後にたどり着いた一般言語学の構想の限界と可能性を明らかにしようとするものであった。ところで互氏は、わが国におけるソシュール研究の現在のところひとつの到達点であるとも言えるこの著作の「まえがき」の中で、ソシュールの一般言語学講義で何がなされたのかを知ろうとするならば、まず何よりもソシュールの原資料を読む必要があり、ソシュールの軌跡を追いかながらその軌跡の背景を知らなければならないとしたうえで、「不思議なことに、これまで誰一人としてそれを実行してこなかったのもまた事実なのだ」²と述べている。

しかしながら、互氏のこうした言葉を読むとき、私たちがすぐに思い浮かべるのは、わが国で1980年代初めに出され、ソシュールの名前をあらためて世に知らしめた、丸山圭三郎氏の金字塔的な著作『ソシュールの思想』とそれに続く一連の仕事である。ソシュールの原資料をも丹念に読み込みながら、ソシュール言語学の軌跡をたどろうとしたのは、他ならぬ丸山氏ではなかったか。そのような思いが頭をよぎらずにはおれない。

*東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期

丸山氏の著作が世に出されてすでに約30年という月日が過ぎている。しかし最近のソシュール・リバイバルにあたって、いま一度このソシュール研究の「古典」に立ち戻り、その手法や主張を再確認し、そのうえでこの著作の持つ今日的な意義についてあらためて考えてみることも必要なのではないであろうか。

本書『ソシュールの思想』は、フランス思想研究者である丸山圭三郎氏が、ソシュール言語学について著した一連の著作のうち、一番初めに刊行されたものである。ソシュールの提唱した言語学理論の内容については『一般言語学講義』という名前で人口に膾炙しているが、この『講義』は、実はソシュール自身の手によって書かれたものではなく、ソシュールの弟子たちがまとめたものである。丸山氏の試みは、この『講義』に対する批判や原資料の読み直しを通して、本来のソシュール像を明らかにしようとしたものであって、こうした試みは、わが国では本書が初めてのものであった。丸山氏は、本書以降も数多くのソシュール研究書を世に出されており、わが国において誰もが認めるソシュール研究の第一人者であると言える。本書『ソシュールの思想』は、そうした丸山氏の数多くの著作の中でも、ソシュール像がトータルに、そして分かりやすく示されたものであり、現在においても、初学者から専門研究者まで広い読者を対象とするものであると言えよう。

本書の全体構成は以下のようになっている。

I ソシュールの全体像

第一章 ソシュールの生涯とその謎

第二章 『一般言語学講義』と原資料

第三章 ソシュール理論とその基本概念

II ソシュールと現代思想

第一章 ソシュールとメルロ＝ポンティ—語る主体への還帰—

第二章 ソシュールとテル・ケル派—貨幣と言語記号のアナロジー—

第三章 ソシュールとバルト—記号学と言語学の問題をめぐって—

第四章 ソシュールとサルトル—言語の非記号性と意味創造—

III ソシュール学説の諸問題

第一章 ラングとパロールと実践

第二章 シーニュの恣意性

第三章 言語における《意味》と《価値》の概念

まず第I部は三つの章に分けられており、ソシュール像とその理論の基礎のおおよそが捉えられるようになっている。

第一章「ソシュールの生涯とその謎」では、主にソシュールの生涯が詳しく紹介されている。フェルディナン・ド・ソシュールは、1857年にフランスのユグノー貴族の後裔

であるジュネーヴの旧家の長子として生まれた。中学生の頃には早くも処女作「諸言語に関する試論」を書き、さらに21歳の時には「言語学の巨匠の仲間入りをさせるに十分なもの」³と評される論文「インド＝ヨーロッパ諸語における母音の原初体系に関する覚え書」を著した。丸山氏によると、この論文の中には、すでに従来の比較文法と歴史言語学の方法論に対する批判と告発がこめられていたという。その後ソシュールは、パリでの研究時代を経て再びジュネーヴに戻り、ジュネーヴ大学で講義をすることになった。そして1907年から3回（1907年、1908—9年、1910—11年）にわたって担当した言語学に関する講義こそが、後に『一般言語学講義』として出版されることになるものであった。

丸山氏は、この第一章で、ソシュールの生涯をめぐる大きな三つの謎を提起している。それは、1. 伝記上の問題、2. 著作としての『一般言語学講義』をめぐる疑問、3. そこに表されているソシュールの思想自体にまつわる謎、である。伝記上の謎についてはこの第一章の中で解決が示されているが、その他の二つの謎については、本書の全体を通して議論されている。

第二章「『一般言語学講義』と原資料」では、この2つ目の謎である『講義』をめぐる疑問が扱われている。そもそもこの『講義』は、ソシュールの手による著作ではない。ソシュールの弟子であるバイイとセシュエが当時講義を受けていた学生たちのノートをもとに編纂したものである。つまり、そのバイイとセシュエも実際の講義を聴講したわけではなく、ソシュールの3回にわたる講義は著作『講義』の中ではバラバラに組み立てられ、その思想も間違った形で記されているという。丸山氏はバイイたちによって誤って伝えられた『講義』のソシュールと、実際の講義ノートを照らし合わせるという地道な作業を通して、本来のソシュール像を明らかにしようと試みているのである。丸山氏は、バイイたちの誤りを、1「転倒現象」、2「加筆」もしくは「創作」、3「欠落」もしくは「捨象」、4「分断、混合」、5「改竄」の五つに分け、それぞれいくつかの実例を示しながら説明している。そして編者たちが作り上げてしまった誤った思想こそ、皮肉にも「ソシュールが一生批判し続けた、主知主義、経験主義、アトミズム、反歴史主義、反ユマニスム、そして主体と無視したラング主義に近いもの」⁴なのであった。そして『講義』のみから出発してソシュールを批判する学者たちの、やはり一方的な解釈や誤った理解を取り上げ、それらもまたソシュールを正確に捉えていないが故におきた誤読であると指摘するのである。

本書の中で最もウエイトを占めているのが、第Ⅰ部第三章「ソシュール理論とその基本概念」である。そこでは、まずソシュール以前の言語思想の歴史が概観され、その後ソシュール自身の理論と基本概念について語られる。その一部（ランガージュ、ラング、パロール）を見てみよう。

ソシュールは、それまであまりにも漠然と使われてきた「言葉」という概念に注目して、まずはそれを厳密に規定することから出発した。「言葉」という表現は多義的であり、

それをソシュールはまずランガージュ langage とラング langue に分けた。ランガージュとは、「人間のもつ普遍的な言語能力・抽象能力・カテゴリー化の能力およびその諸活動」⁵である。それに対してラングとは、それぞれの共同体で用いられている日本語や英語、フランス語といった多種多様な国語体であり、その社会特有のものである。後者が顕在的な社会制度であるのに対し、前者は人間が生得的にもつ普遍的潜在能力である。このランガージュは、それのみでは用いることは出来ず、ラング（一応「言語」という訳があてられる概念）があつて初めて顕現することになる。例えば狼に育てられたアマラとカマラのように、ランガージュ能力を持ってはいても、適切な環境になければ行使できない潜在能力なのである。ソシュールは第三回講義においてランガージュとラングを次のように定義している。

個々人には分節言語能力と呼ぶことができる一つの能力がある。……しかし、これはあくまで能力に過ぎず、外から与えられるもう一つのもの、すなわちラングなしにこれを行使することは事実上不可能であろう。ランガージュは抽象的なものであり、それが現前するためには人間存在を前提とする。……このようにランガージュ能力とラングを区別することによって、我々は、ラングに〈産物〉の名を与えることができることがわかる。これは社会的産物なのである。ランガージュは、常にラングによって現前すると言えるであろう。⁶

このように、ランガージュとラングという区別は、それぞれ潜在的能力と顕在的社会制度というように対比的にとらえることができる。しかし、ラングのこの顕在性も決して物理的な実体ではない。ラングとは心的な構造・制度である。日本語ならば日本語の音声の組み合わせ方、語の作り方、語のもつ意味領域など一定の規則があり、この規則の総体がラングなのである。そしてラングをパロールとの対比において見たとき、今度は反対にラングが潜在的な構造で、パロールはそれを顕在化し具体化したものということになる。パロールとは、ラングの実現であり、すなわち発話行為なのである。

さらにラングとパロールは相互依存の形をとる。個人の言葉が人から理解されるためには社会の約束事（ラング）がなければならないが、その約束事が成立するためには、まず具体的発話（パロール）がなければならない。

丸山氏は、ソシュールに対して「語る行為の無視」や「語る主体の不在」という批判が向けられるのは、ソシュールがパロールの言語学の存在を指摘しながら、『講義』の中ではほとんどそれを展開しなかったからだと述べている。

ラングとパロールの対立は、単に言語記号と物理音、社会的事象と個人的事象という対立には帰せられない。丸山氏によれば、ソシュールは二種のパロールを考えていたという。第一のパロールは、全く物理的・偶然的な現象に過ぎず、単なる副次的行為である。ある楽曲の楽譜をラング（本質的なもの）に例えるなら、その既存の楽譜をただ演

奏して音を発することはパロールにあたり、それは非本質的なものということになる。それに対して第二のパロールは、類推的創造の源となるばかりでなく、個人のパロール行為が、あらゆる瞬間に世界（体系）の再布置となり、新しい価値の創造である点において「第一のそれとは比較にならない重要性」をもつものである、と丸山氏は述べている。

第Ⅱ部からはその第一章「ソシュールとメルロ＝ポンティ—語る主体への還帰—」を取り上げておきたい。この章では、メルロ＝ポンティの言語論を批判するムーナンへの疑問から始まっている。丸山氏はソシュールとメルロ＝ポンティの思想上の類似点を挙げ、両者とも同じ方向を向いていたのだと述べている。「コトバは記号ではない」これがソシュールとメルロ＝ポンティに共通する最も根本的な考え方である。つまりコトバをコトバ以外の何か、先立って存在している何かを指し示す単なる標識ではないと考えるのである。コトバはコトバ自身の中に意味をもつ。それは表現であると同時に意味なのである。両者に共通するこういった考えを、丸山氏は彼らの多くの発言や手稿を引用しながら説明している。それらから見えてくる両者の姿は、確かに驚くほど類似している。

主体的に「創り上げる構造」であるはずの言語構造は、あたかも元々「与えられた構造」であったかのように惰性化していく。そして人間の意識は気づかぬうちに、その惰性化した既存の意味体系の中に閉じこめられていく。ソシュールとメルロ＝ポンティは、閉じ込められていく人間の意識を、コトバの本質的表現作用を通して解放しようと試みた。主体を無意味化し、不在化させる主知主義と経験主義の否定を通して「語る主体」を回復させようとしたのである。

最後の第Ⅲ部は、タイトルこそ「ソシュール学説の諸問題」となっているが、かといって単にソシュール理論の問題点を列挙してそれらを批判しようとしているのではない。むしろソシュールの思想の複雑・煩雑な外観を緻密に整理し直し、その分かりにくさを解きほぐして解決に導いていこうとしている。

例えば第二章「シニユの恣意性」では、『講義』にいまだ残されている問題点の中でもとりわけ重要とされる言語記号の「恣意性 arbitraire」について扱われている。ソシュールの価値体系の概念ではまさに、シニユの恣意性こそがその基盤になっているが、その恣意性の概念を誤解している学者は実は少なくない。丸山氏はそうしたなかでもバンヴェニストによるソシュール批判を取り上げ、その多くは正当性がないものだと指摘している。例えばそれは次のような批判である。

シニフィアンとシニフィエの間の絆は [ソシュールの言うように] 恣意的ではない。それどころか、その絆は必然的である。概念（シニフィエ）《boeuf》は、私の意識内では、否応なしに bof という音の総体（シニフィアン）と同一物なのだ。⁷

この批判は全くソシュールの恣意性の概念を理解していないがゆえのものである。ソ

シュールが繰り返し何度も述べているように、シニフィアンはこれを用いる言語共同体との結果的関係においては、決して自由なものなのではなく、その反対に強制されたもの以外の何ものでもない。実際、ソシュールは以下のように述べているのである。

それが表している観念との関係においては、いかなるシニフィアンも恣意的であり、自由に選ばれたかの如くであり、他のシニフィアンに代えられるかのように思われる (table [テーブル] は sable [砂] と表現されてもいいし、その逆でもいい)。それを用いるべく運命づけられている人間社会との関連においては、シーニュはいささかも自由なものではなく、課せられたものである。⁸

丸山氏は、バンヴェニストが恣意性を否定したのは、既にある個別言語内の構造という視点からのみであり、あらかじめ分節された関係しか問題にしていないためであると述べているのである。

本書『ソシュールの思想』は、丸山圭三郎氏のソシュール研究における初期の作品にあたる。それこそが「ソシュールの思想上も最も重大な点」だと言われるソシュールの人生とその謎を詳らかにして始まる本書からは、ソシュールの苦悩や言語学への姿勢、厳格さなども伝わり、ソシュールの入門書としてはもっとも手に取りやすい作品となっている。しかしソシュールの思想を単に簡単に紹介しているというわけではなく、その思想をすみずみまで丹念にたどりながら議論を深く展開しようとしている。また、随所にソシュールに対する丸山氏による「読み」がちりばめられている。本書執筆当時の丸山氏は、パロールとラングの二項対立に焦点を当てることが多く、さらに構造主義の始祖と呼ばれるソシュールの、創造的な思考の側面、つまり単なる発話行為にとどまらない「創造的なパロール」を志向する側面を強調していた。ここではほとんど触れることは出来なかつたが、本書では第Ⅰ部の第三章「ソシュール理論とその基本概念」や第Ⅱ部第一章「ソシュールとメルロー＝ポンティー語る主体への還帰」、第Ⅲ部第一章「ラングとパロールと実践」などにおいて、こうした側面についての考察が行われている。しかし後の研究においては、丸山氏はこのことを否定・修正し、ソシュールの思想についての自らの立場を多少とも改めているのである。

そういうスタティックな機能主義に反対した私は、ひと昔前に、ソシュールの、あのパロール主義に非常にひかれた時期があったことを、白状しなければいけません。なるほど、私たちはラングという制度の中にいるけれども、同時にラングをも壊す、あるいは引っくり返す、あるいは変えることができるのだ、というパロール主義は、とても元気がいいです。[……] 今の私は、そういう考え方にはクエスチョンマークなんです。[……] ラングとパロールの弁証法信仰に戻ってはならないというところが、私のソシュールに対する第一の疑問であります。⁹

パロールもラングも私たち「意識的な主体」において存在することばの形である。しかし、私たちの「意識的な主体」とは何なのか。果たして私たち自身を貫いているのは、本当にラングとパロールなのか。丸山氏は、力強く私たちの中に存在するのは、いまだ言語化（ラング化）されていないランガージュなのだと。それはラングとパロールが存在する「表層意識」の下の「深層意識」であるという。このランガージュこそ、ラングを生み出していく人間の生の躍動、意識の深い部分でうごめくシンボル化行為なのである。こうして丸山氏は、後期においては純粹に言語の内部の問題にとどまらず、人間存在と意識の問題や、人間存在と言語の内的な結びつきの問題といった、より壮大なテーマへと研究の対象を広げていく。これらの主題に関しては、私たち『言葉と無意識』（1987年）や『生命と過剰』（1987年）などの著作でその神髄に触れることができるであろう。

松澤和宏氏は小松英輔氏の『もう一人のソシュール』（2011年）に寄せた序文の中で、ソシュールの原資料についての考え方をめぐって丸山氏と小松氏の間に齟齬が生じたが、丸山氏が原資料に当たる姿勢は「ソシュールの創造的受容」とも言うべきものであったと述べている¹⁰。そもそもソシュール研究に限らず、私たちが「原資料」を解読し、それについて論じる場合には、必ず何らかの「解釈」が伴うことは否定できない。しかし「解釈」が入るからといって、そこに「原資料」へのアプローチが存在しないということにはならない。丸山氏のソシュール研究についてもそれは同様である。丸山氏の原資料へのアプローチは当然評価されしかるべきであろう。そのうえで、ソシュール・リバイバルが見られる今日、私たちは丸山氏による「ソシュールの創造的受容」の中身とその可能性をあらためて検討しなおし、より新しいソシュール像の構築へと結びつけてゆくことが大切なではないであろうか。

¹ 互盛央『フェルディナン・ド・ソシュール〈言語学〉の孤独、「一般言語学」の夢』作品社、2009年。

² 同書、ix頁。

³ 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981年、16頁。

⁴ 同書、72頁。

⁵ 同書、79頁。

⁶ 同書、81頁。コンスタンタンのノート、第三回講義、断章番号 159、230。

⁷ 同書、302頁。E.Benveniste,op.cit.,p.52.

⁸ 同書、302~303頁。コンスタンタンのノート、第三回講義、断章番号 1177。

⁹ 丸山圭三郎『言葉・文化・無意識』進学研究社、1988年、36~37頁。

¹⁰ 松澤和宏「序文・小松英輔氏とソシュール文献学」、小松英輔『もう一人のソシュール』エディット・パルク、2011年、所収、v頁。